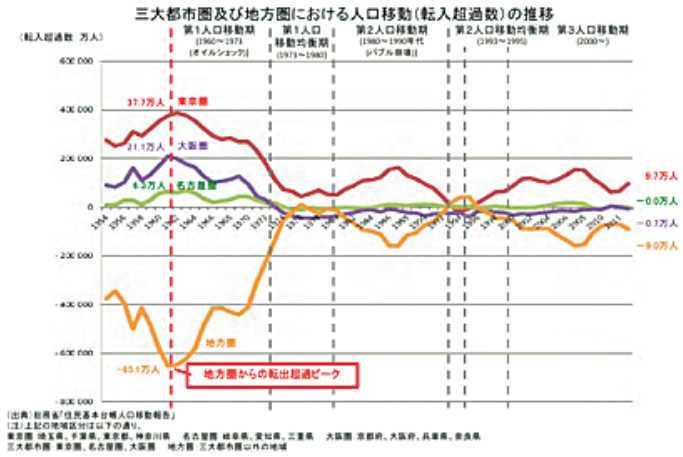
列島保全への課題



わが国、国土への働きかけの歴史⑩

全国総合開発計画（全総）と新全総

戦後の社会資本整備の考え方を知るには、相次いでつくられた「全国総合開発計画」が、何を背景と認識し、どんなスローガンを掲げたかを見ると分かりやすい。

1950年（昭和25）に全国総合開発法が公布され、これに基づく総合開発計画が何度か試みられたが正式決定に至らなかった。60年に池田勇人内閣の所得倍増計画が定められると、そのための国土政策の計画として62年、最初の全国総合開発計画が決定された。

この計画は、大都市の過密化の解消と地域格差の拡大防止を重要な地域的課題とし、解決策として拠点開発方式を採用した。これを具体化するため、全国を過密地域、整備地域、開発地域に区分し、それぞれに対応する施策の基本方向を定めた。拠点開発方式の具体的戦略手段として、「新産業都市建設促進法」と「工業整備特別地域整備促進法」がつくられた。

国力の制約で重点整備

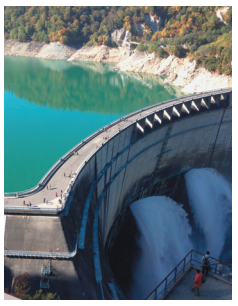
両法により整備すべきとして指定された地域は、その後の地域整備法に基づく地域指定に比べると、当時の国力（国の財政力や経済力）を反映して、きわめて限定的なもので、指定区域をもたない県がいくつもあった。この頃は国力に制約もあり、重点的な整備をしなければならないことを人々が受け入れていた時代であった。

全総時代を具体的にイメージしてもらうため、この時代にできたものを以下にいくつか紹介したい。

1962年（昭和37）＝奥只見ダム（福島県）／若戸大橋（福岡県）▽63年＝黒部ダム（富山県）▽64年＝伊勢湾高潮防潮堤（愛知県）／東海道新幹線▽65年＝名神高速道路全通▽66年＝天草五橋（熊本県）▽68年＝下久保ダム（群馬県）

◇

69年（昭和44）には「新全総（新全国総合開発計画）」が策定された。全総の予想をはるかに上回る速さで経済が成長し、全総の意図にもかかわらず、人口・産業の大都市集中と過疎問題が生じたことと自然の調和、自然の恒久的保護・保存、地域特性を生かした開発整備による国土利用の再編成と効率化、安全・快適・文化的環境条件の整備保全などの目標を掲げて「大規模プロジェクト構想」がうたわれた。


黒部ダム

新幹線、高速道路等の全国ネットワークを整備し、大規模産業開発プロジェクトなどを推進することで国土利用の偏在を是正し、過密過疎、地域格差を解消することが新全総の狙いだった。

新全総時代に完成した事業は次の通りである。

69年（昭和44）＝八郎潟干拓国営事業（秋田県）／東名高速道路全通▽72年＝山陽新幹線新大阪～岡山間開通▽74年＝香川用水通水（香川県・高知県）▽75年＝山陽新幹線全通（東京～博多間新幹線全線開通）

72年には『日本列島改造論』（田中角栄著）が出版されている。

需要が爆発した時代

経済成長の時代は別の言い方をすると「需要が爆発した時代」と言える。年々急速に交通量が伸び、人の流れや物流が増えたため、対応するのが精一杯という時代。道路も渋滞を起こさせないようにし、渋滞力所を解消することが何より急がれた。

河川整備についても同様の考え方だった。降った雨を一秒でも早く海に運ぶのがよりよい河川と考えるなら、コンクリートで固めてしまう河川整備は、味も素っ気もないが合理的な方法だった。その後、生活周辺の自然環境を大切にする価値が重視される時代になると、こうした考え方は否定されることになるが、需要を効率的に追いかける観点からは合理性はあったのである。

資金を効率的に用いながら、需要に応じた供給を行うことが何より優先された時代の遺物と言えるが、小規模な水路など、現在もこの方法で十分なものもある。

三大都市圏と地方圏の人口の社会増減を示した図を見れば分かるように、大変な数の人間が地方から大都市に移動し、やがて過密過疎の問題になる。人口移動は住宅行政でも、戸数の確保を何にもまして優先課題とさせた。

一言でいえば、需要の爆発への対応が国土造りで最優先される時代が、高度経済成長の時代だったといえる。

高度経済成長とインフラ整備

東名高速道路

碑（いしぶみ）の記憶⑧

津浪記念塔

岩手県普代村太田名部

明治29年、昭和8年の三陸地震津波の教訓として、太田名部漁港に近い標高109㍍の山すそに建つ高さ1・9㍍の碑は、表に5カ条の注意事項、裏に被災実態を刻む。

【碑文の表】

一、大地震の後には津波が来る

一、地震があったら高い所へ集まれ

一、津波に追はれたらどこでも此所位より高い所へ

一、遠くへ逃げては津波に追付かる　近くの高い所に用意して置け

一、県指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

【碑文の裏】

明治二十九年丙申年旧五月五日午後八時　大津波襲来

普代村の被害流失　家屋七十八戸死者三百四十三名負傷百五十八名

昭和八年三月三日午前二時三十分　上下に動揺する強震あり　続いて三時頃より大音響と共に大津波の襲来あり

三時十分頃　最も被害あり

普代村の流失戸数七十八戸

死者百三十五名

負傷者八十一名